
過不足、 0

西宮好一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過不足、0

【Nコード】

N9303W

【作者名】

西宮好一

【あらすじ】

突如現れた人生の壁。貴明の心は道端の枯れ葉のように乾いた。だが、高校の同期やバイト先の人々との交流が再び潤いを与える。そして、涼村彩月とのさりげない出会い。様々な温かい人々が、貴明の人生の壁を少しずつ壊していく。駅ナカにあるコンビニが舞台の、とある浪人生のビミョーな物語。

いくつかの始まり（前書き）

このページを開いて頂きありがとうございます。

この作品は思い立ったままに書いていきますので、多分雑になります。

まだ小説を書き始めて間もないので、ご了承下さい。

いくつかの始まり

「えっ、ほんまですかっ？」

採用を伝える笑い混じりの声が、携帯の向こうから耳に届いた。

ありがとうございますっ、と精一杯の誠意を込めて言ったのはいつ以来だろう。

僕は店長から次回会う日を告げられ、

はい、はい、と自分が写るガラス張りのドアに向かって頭を下げた。軽くくなった足取りで席に戻ってきた僕を、井藤吾朗はペン回しをしながら見ていた。

そんな井藤にこれ以上ないガッツポーズをし、

「神部貴明、バイト受かりました」

と静かなファミレスには響いてしまう声で言った。

途端に井藤は呆れた顔を作り、

「浪人がバイトなんて考えられへんわ」

と誰もが言いそうなことを、誰もが言いそうなトーンで言った。

よく言われる、と笑って返した僕はテーブルの上に置いてあったオレンジジュースを、

一口大分、電話で乾いた喉に勢い良く流し込んだ。

浪人が決まって、あと一週間で一ヶ月となる。

僕は浪人仲間の井藤と、

「バイト受かったん？」

そう言っただけから戻ってきた外山正樹と一緒にファミレスで勉強会を開いていた。

「いやあ、頑張ったださいね、やって」

鞆から水色のカバーがされたスケジュール帳を出しながら、外山に笑って返した。

「最近見た中で一番幸せな顔してるやん」

そう言っただけ外山は少し心配そうな表情を浮かべた。

僕は店長から言われた日の欄に、丁寧に“研修”と書きながら、

「まあついてないことばっかやったからねえ」

と少し元気無さげに言った。

今回、僕が受かったバイトは駅の中にあるコンビニだ。

そこに落ち着くまでに僕は二件のバイトに落ちている。

スーツ販売店と居酒屋。

浪人という現実には計り知れない破壊力で心をズタズタにした。

その心に突きつけられた二つの不採用と一つの別れ。

僕は完全に自信というものを失っていた。

そんな完全に水分を失った枯れ葉のような僕とよく一緒にいたのが、

外山だ。

「予備校どないするん？」

外山の問いに、夏には二人のどこに行くよ、とスケジュール帳を鞆に納しながら言った。

絶対来ない、という井藤の揺るがない決めつけに、
適当に笑って返し、僕は古典の助動詞の表を遠くから眺めるように見た。

あと少しで思い出の場所を通る。

僕は体をひねって、景色が流れていく窓の外を見た。
電車が緩いカーブに入ってから少し、その公園は見えてくる。

想いを告げた場所。別れを告げられた場所。

高三になったばかりの春、僕はその公園で初めて好きな人に想いを告げた。

まだ若い桜の木があちこちにある公園。そのときはちょうど満開の時期だった。

幼い子供の笑い声が穏やかな春をより穏やかにしていたのを今でも思い出す。

「待ってたよ、その言葉」

僕の想いを聞いた白河唯は吸い込まれそうな笑顔でそう言い、そし

て抱きついてきた。

公園が見え始め、僕はさらに体をひねった。

この前の面接のときは満開だった桜の木にも、深い緑色が目立ち始めている。

そして想いを告げ、別れを告げられたベンチも際立って目に入ってきた。

公園が流れ去り、電車はカーブを抜け速度を少し上げた。体勢をもとに戻し、鞆からスケジュール帳を出す。

もう一ヶ月も経つんかあ。

僕は三月のページを開きながら、口には出さずに言った。そしてため息をついた。

三月の半ば、ちょうど浪人が決まって数日後のこと。僕は唯に呼び出された。

何故か僕の最寄り駅の切符売り場前にいた彼女は、あの公園に行くこと、と言った。

一瞬、？が頭を支配したが彼女の笑顔を見て疑念は消し去り、僕は公園の最寄り駅への切符を買った。

まだ桜も咲き始めている肌寒い公園には僕ら二人と犬を連れた中年女性しかいなかった。

彼女はいつもと変わらない素振りをしていた。

僕の先を歩いたり、そして振り返って笑ってみたり。

この笑顔を見る度に告白の日を思い出す。あと少しで一年だ。

「座ろっか」

そう言った彼女はゆらゆらと思い出のベンチへ向かい、腰を降ろした。

そして座ろうとした僕を見上げて、

「ココア飲みたいなあ」

と近くの自販機を指差した。

僕と彼女はその自販機のココアが好きだった。

ココアを二つ買い、足早にベンチへ戻った。

一本を彼女に渡し、やっとベンチに座る。

そして次の瞬間、僕はその現実から立ち去りたくなった。

「別れよっか」

ココアを一口飲んだ彼女はまだ蕾の桜の木を見て言った。

えっ、と僕は聞き返す。

そして彼女はもう一度、別れよう、と呟くように言った。

頭が真っ白になった。まるで雷が落ちたみたいに。

前兆など全く無い、ココアを受け取るときもいつもの彼女。あまりにも突然過ぎる。

言葉を失った僕を見て、彼女は言った。

「貴明のこと嫌いになったわけでもないし、好きな人ができたわけでもない」

「じゃあ、なんで」

「うちの大学知ってるやろ？」

北海道大学の薬学部、と答えた。

同時に彼女が賢すぎることを思い出し、浪人の僕は少し惨めに思えた。

「大阪と北海道。あまりにも遠すぎる」

彼女はうつむき始めた。ホットココアを包み込んだ白い手が少し震えている。

寒さからか、それとも。

「大丈夫やて。電話とかあるし、夏休みには会いに行くし」

だから遠距離でも大丈夫、と僕は笑顔で言った。

それはあまりにも軽い言葉だった。

すると彼女は、

「うちだって別れたないよ。貴明のこと好きやし、一緒にいたいと思ってる。」

せやけど、貴明は来年に向けて一年中忙しいと思うし、うちもそれ

なりに忙しいと思う。

しかも、大阪と北海道。四年間ずっと貴明に気を遣わせるのとか嫌や」

辛いねん、と声を震わした。

彼女が苦しんでいるのに、気づけなかった僕は再び言葉を失った。

彼女のすすり泣く声が寂しい公園をより寂しくする。

定期的に通る電車の軽快な音がそこに嫌なほど響いてしまう。

だが、その電車の音が彼女のすすり泣く声を消してくれることに、僕は心なしホッとしていた。

女性らしい咳払いをし、彼女が再び口を開いた。

「ごめんね。自分勝手なんわかってる。けど、貴明に変な気を遣わせたくないねん。

このまま付き合い続けたら迷惑かけるだけだから」

僕は、自分勝手やなんて思わんで、と彼女の小さな背中をトントンと叩き、

「わかったから」

と別れを受け止めた。

それ以上その公園で何を言ったか、何をしたかなど覚えていない。ただ覚えているのが、彼女が完全に泣き止んだのが空が暗くなり始めてからなのと、

ずっと開けずに冷めたココアを持って帰って家で飲んだこと。

それがその公園での最後の思い出。

帰りの電車の中では僕も彼女も黙ったまま。

そして僕は彼女の最寄り駅で電車を降り、改札を出る彼女に手を振る。

改札がボタンと閉じられたのを見て、僕は初めて涙を流した。

僕と彼女の間に越えられない壁ができた現実を知って。

ホームに戻り、電車を待っていた。

各駅停車しか停まらない彼女の駅を急行が滑るように通り過ぎる。

風圧で乱れた前髪を直しながら、

僕は彼女が僕の駅まで来ていた理由がわかった気がした。

彼女がわざわざ改札を出て待つなんて初めてだ。

いつもと変わらないと思っていた彼女はいつもと変わっていたのだ。

今考えてみたら、なんで簡単に別れを受け入れたのだろう、と思う。
壁を越える手段はいくつかあったはずなのに。

電話で呼び出されてからデートと書いたその日付の欄を見て悲しく
なった僕は、

スケジュール帳を鞆に納し、代わりにオレンジジュースを出して飲
んだ。

電車は徐々に速度を落とし、終点の駅に入ろうとしている。

結構な時間、白河唯との過去を考えていたことに驚いた。

これから研修だ。

そう自分に言い聞かせて、僕は席を立つ。

電車が完全に止まり、ドアが開いた。

各車両から蜂が巣から出てくるように人がまばらに出てくる。

そして、僕はホームに飛び出した蜂の群の中を糸を縫うように小走りに進んだ。

まるで何かから逃げ切るように。

もう過去は忘れよう。

「もしかして神部君？」

そわそわしていた僕を聞き覚えのある声が振り向かせた。

はい、と返事した僕を見て、寺島店長は安堵の表情を浮かべた。

僕はそのまま店長に連れられ、駅サービスセンターの裏の部屋に入った。

そこにはいくつかの書類と制服らしきものがいくつかあった。

どうぞ座って、と言われたので、店長が座ってから僕も座った。

僕は駅の裏側がこんな感じなんやあ、とまるで遊園地に来た子供みたいに視線を巡らせる。

店長は意外にも若かった。恐らく三十歳少し、ちなみに女性だ。それから書類に判子を何回も押し、何回も直筆のサインを書かされた。

面接のときに言っておいたサイズの制服とズボンをもらい、着替えた。

それから言葉遣いの練習を、これもまた何回も繰り返し、部屋に入ってから約一時間、ようやくコンビ二へと向かう。僕は店長にバレないように深く深く息を吸った。

「新しくアルバイトで来た神部君」

と店長はパートのおばちゃんに言っただけだった。

僕もその後ろに付いていき、

神部です。よろしく願います、と言った。

高校のとき、野球一筋だった僕はバイトなどしたことがない。

そんな僕に店長は、本当に丁寧に教えてくれた。

お札の数え方、レジのボタンの種類などなど。

そして四、五回店長と模擬接客をした後、僕は研修という名札を付けてレジに立った。

「どうやった？初めてのバイト」

初めてのバイトが終わり、家で疲れて寝ていたときに外山から電話があった。

「体力には自信あったんやけど、疲れたわ」

と僕は重い体を起こした。

フフと鼻で笑った外山は、

「勉強もそれぐらい頑張ってくれたらなあ」と母親みたいなことを言った。

「頑張ります」

じゃあまた日曜な、と僕は電話を切った。

毎週日曜。井藤と外山とファミレスで勉強する日。

今日したことを忘れたらいけないから、という店長の理由を鵜呑みし、また明後日、僕はコンビニへ行く。

あと二回、夕勤を経験し、それから僕が応募した夜勤へシフトを移す。

何もかもが初めての世界。

一体どんな未来が待っているのだろう。

そしてこれから出会う色々な人。

僕は転校生のような気分を味わっていた。

期待、そして不安。今は後者の方が大きい。

窓を開け、ファンタグレイプをクビツと飲んだ。

炭酸が思った以上に口を騒がせ、少し目が冴える。

すると生暖かい夜風がワックスの取れた髪を撫でた。季節は確実に進んでいる。

振り返ると机に置いてあったマニュアルが何枚か床に落ちていた。

僕も心機一転、頑張らなければ。

いくつかの始まり (後書き)

読んで頂きありがとうございます。
よければまた来て下さいね！
本当にありがとうございます。

秋田さん

心地好さしかなかった季節も気がつけばムシムシと湿っぽくなり、洗濯物のおいを気にする梅雨となっていた。

そして今日も雨。青色に染まった空はここ三日は見えていない。先頭車両の窓には次から次へと雨粒が打ち付け、そして横に流れ消えていく。

バイトを始めてもう少しで二ヶ月になる。

夜勤の仕事にも慣れ、研修の名札はもうない。

バイト先にも溶け込むことに成功し、良いことばかりだ。

終点に着き、ホームから見えるコンビニに僕は裏口から入った。

着替えを済ませ、駅サービスセンターの裏にある駅務室に金庫の鍵を取りに行く。

このときに駅員の人達と少し話すが、何気に好きだ。

「おお、神部君かぁ。今日もよろしく」

そう大きめの声で言ってきたのは、駅の重役、青木さんだ。

「よろしく願います。広島どうですか？」

青木さんは大の広島ファンだ。

「いやぁ、日ハムに五対一で負けとんのや。阪神はどうや？」

「途中まで家で見てたんですけど、ソフトバンクに確か二対一で負けてました。やっぱりパリーグは強いです」
ああ、七回裏三対一で負けとるわ、と青木さんはパソコン画面を見ながら言った。

コンビニの泊まり勤務と同じように駅にも泊まり勤務がある。

コンビニは二人一組だが、駅は五人一組だ。

青木さんのような重役一人に、駅員さんが四人。

他にも重役は松田さんと南丘さんがいる。

仮眠室も同じフロアにあるので、夜勤は駅の方々と仲良くなる。

金庫の鍵を貰い、仮眠室へ戻ると廊下に秋田さんがいた。

秋田さんは夜勤研修のときにお世話になった先輩だ。

「おはようございます」

何故かこのコンビニは時間に関係なく挨拶はこうなのだ。

「おうっ」

秋田さんは陽気に短く答えた。

秋田さんは僕より五つ年上で、大阪大学の大学院生。

研修のときは厳しかったが、普通に優しい人だ。

恋愛経験が豊富で、閉店後に色々と経験談を淡々と語る。

付き合ったのが唯しかいない僕は秋田さんの話に頷くことしかできない。

そういえば、この前唯からメールがきた。
札幌の時計台の前で友達と写っている写真付きで。
相変わらず唯の笑顔には吸い込まれる。
僕はそのメールをとりあえず保護した。

早く唯に新しい彼氏ができないかなあ、と最近思う。
正直まだ引きずっている。

何か吹っ切れる方法はないのかなあ。
このままだと、一年中僕の心は梅雨だ。

店に入り、夕勤の人から引き継ぎを受け、レジに立つ。

ファッション誌や経済誌がごちゃごちゃになった本棚が真正面に見える。

どうして元あった場所に戻さないのだろう。

勤務開始早々、僕は少しイライラした。

接客仕事をしていると、色んな人間がいるんだなあと思えて思い知る。

ありがとう、と言ってくれる良い人や、何様のつもり？と思う嫌な人間など。

前者は意外にも敵つそうな人やチャライ人が多い。

人は本当に見かけによらずだ、と深く感動した。

閉店まであと三十分。

僕は外に置いてあった新聞を店内に戻しにかかった。

自動ドアが開くと、一気に体を梅雨の湿気が包み込む。

ホームに居座っているいくつもの電車のせいかな、その湿気は妙に生

暖かい。

さっさと空調の整った店内に新聞を戻し、売れ残っていた新聞を一つにまとめた。

このコンビニは駅ナカということもあり、二十三日には店を閉める。それから一時まで精算や入金など事務的なことや品出しをする。夜勤が一番忙しい、と秋田さんは言うが、確かにそうだと思う。

「いやあ、お疲れ神部ちゃん」

神部ちゃん。これが僕のアダ名だ。

夜勤の先輩と夕勤の一部の人がこう呼ぶ。

「お疲れ様です」

閉店してレジ以外の電灯を全て消した店内にはいつも心が少し踊る。BGMから流れるAKB48の歌が結構な音量で薄暗い店内を騒がせた。

お金のチェックを終え、一般的な二つの青いバケツに四つのレジのお金を紙幣と硬貨に分けて入れる。

硬貨の塊がバケツに落ちる音が耳に嫌に響く。

秋田さんがパソコンで必要な資料を打ち込んでくれているので、僕は駅務室にある入金機へ二つのバケツを持ち、向かった。

駅務室に入ると、青木さんがパソコンと向き合っていた。

「おうっ、お疲れさん。今日は早いなあ」

帽子をかぶっていた跡が後頭部に残っている。
横から見ると余計に目立っていた。

「はい。秋田さんがもう全部やってくれはったんで」

このコンビニ歴五年の秋田さんはやっぱり凄い。

ふと、僕はパソコンに向かう秋田さんの背中を思い浮かべた。

「秋ちゃんは長いからなあ。神部君は秋ちゃんを越えるぐらい頑張りや」

そんな青木さんの笑い顔を見て、陽気だなあ、と思わずにはいれなかった。

秋田さんが店から駅務室にコピーで送ってきた資料の金額と入金機が表示する金額が同じことを確認してから、僕は店に戻った。

「OKでした」

ありがとう、と言いつつ秋田さんは再びパソコン室へ入った。

秋田さんが最後の事務的作業に取りかかっているあいだ、僕はコーヒーマーカーの残ったお湯を抜いたり、バックヤードに余っていたパンを出したりした。

全くコンビニは地味な作業が多い。

だが、僕はそんな作業が好きだった。

午前一時。ついに全ての作業が終わった。

とはいっても、また五時から開店準備をしなくてはならないのだが。

「神部ちゃん勉強大丈夫なんか？」

駅務室横にある食堂で僕と秋田さんはカップラーメンを食べている。

「まあ、予備校生には劣りますけど、ぼちぼちです」
ふと井藤のバカにした顔が浮かんた。

ラーメンを勢い良くすすり終え、

「ならええけど」

と秋田さんはあっさり片付けた。

「白河さんとはどおなん？」

秋田さんと初めての夜勤のとき、僕は唯の話をした。

僕から自発的に話したのではない。

彼女は？と聞かれ、別れました、と答えると、その成り行きを聞かれたのだ。

そこで曖昧にすることもできたのだが、僕は秋田さんに事実を話した。

「この前メール来ました」

写メ付きで、と口から出かけたが僕はなんとかその言葉を呑み込んだ。言ったら多分見せないといけな

「辛いなあ、それ」

あつという間に食べ終わったラーメンの汁を捨てながら秋田さんは言った。

「はい。早く新しい彼氏でも作って欲しいですよ」

保護したものの、あの写真はあまり見たくない。

付き合っていた頃の思い出に現実から引き離される気がして。

再び席に着いた秋田さんは、

「神部ちゃんが新しい彼女を作ったらええやん」

とまるで友達を家に呼ぶときのように言った。

「そんな簡単にできませんよ。しかも浪人ですし」

浪人はキツイな、と秋田さんはため息をついた。

僕はこの時間が好きだ。

仕事を終え、何かをおつまみに先輩と話すこの時間が。一時間なんてあつという間に過ぎるほどだ。

秋田さんとは主に人生経験を話す。

高校生活がどうやったかやら、就活が大変やらなど。

たまに自身の彼女についても話してくれる。

もう六年も付き合っているらしい。

おやすみなさい、と仮眠室に入る秋田さんに言い、僕も別の仮眠室に入った。

午前二時半前。あと二時間しか寝れない。

僕は寝れないやろなあ、と思いつつも布団に体半分を入れ、目を瞑った。

相変わらず、この部屋のクーラーはよく効く。

携帯の目覚ましで耳元で鳴った。

午前四時四十分。ああ、まだ寝ていたい。

そつもないので、僕はゴワついた目に目薬を落とした。

一気に目だけが冴え、体がついていかなかった。

なんとか体を起こし、トイレへ向かった。

ラーメンの雰囲気的气味悪く残った口を濯ぐ。

歯に何も付いていないことを確認し、食堂へ向かった。

おはようございます、と泊まり勤務の駅員さんに挨拶して、ありがとうございます、とその駅員さんからレジに入れるお金を頂いた。

そしてレジずつにお金を分けていると、なんとなく顔がむくんだ秋田さんがやって来た。

ありがとう、と作業している僕に言い残し、再び消えた。
その直後、トイレのドアを開ける音がする。

全く別人だ。

制服姿に着替えた秋田さんは、寝起きの秋田さんの面影を一掃していた。

むくんでいた顔も、キリツとしたように見える。

さすがベテランだなあ、と僕は少し呆氣にとられた。

秋田さんが新聞を並べている間、僕は四つのレジにさつき分けたお金を入れた。

ビニールで包まれた硬貨の棒を二つに割るのにもだいぶ慣れた。

そしてそれを終わると、次はコーヒーメーカーに水を入れる。

朝の作業の中でこれが一番好きな作業だ。

一・ハリットル入る計量カップに水を入れる。

このときの水が流れて貯まっていく滑らかな音が、朝の寝起きの耳に優しく響く。

まるでクラシックを聴いているようだ。

始発の電車がホームから薄明かるい空の下へ流れて行った。

研修のときに感心した活動し始めたばかりの駅の光景。

そこには意外にも人が多かった。

普段なら自分がまだベッドに体を委ねているこの早朝に、こんなにもたくさんの人達が一日を始めているなんて。

だが、その光景にも慣れた今。僕は時を感じた。

朝の作業を終え、六時半。今日も店を開ける。

パチパチパチと電気のボタンを一気に押し、店内がいつもの表情に

戻る。

途端に数人のサラリーマンが無表情で入ってきた。

今日もめんどくさい客がいなかったらいいな。

同級生、そして、再び（前書き）

クダクダで本当に申し訳ございません。

同級生、そして、再び

今日はいつもとは違う目的で電車に乗っている。
終点に着き、思わずホームに小さく飛び移った。
季節も着々と進み、長袖には当分の間、タンスに籠ってもらうことになる。

バイト先を通り過ぎ、エスカレーターを歩いて降りる。
すると、駅ナカにあるレトロな喫茶店の前に懐かしい二つの背中があった。

少し近づくと、片方の背中がぐるりと回転し、
「神部」、久しぶりーっ」
と眩しい笑顔で駆け寄ってきた。

「うおー、久しぶりっ」
もう一人も遅れて寄ってきた。

今日は高校の同級生と久しぶりに遊ぶ日だ。
先に僕に気づいたのが中久保亨。

関西学院大学で合唱サークルに入ったらしい。

そしてもう一人が水本尚也。

同志社大学でテニスサークルに入ったらしい。

自宅浪人の僕は外に出る機会がバイトか図書館、買い物ぐらいしか

ない。

外山、井藤と三人でやっていた勉強会も二人は予備校で、僕はバイトでいっぱいだったので解散することにした。

それゆえ、高校の同期の情報などほとんど入ってこない。

真っ黒だった髪を当たり前のように茶色に染めた水本に、

「テニスサークルってことは“ヤリ”サーか？」

と聞くと、神部もか、と眉間にシワを寄せた。

どうやら他の人にも同じようなことを聞かれたみたいだ。

「俺もさつきそう聞いてん」

と中久保が言ってきたので謎は解けた。

頭を人指し指で掻いた水本は、

「真面目なサークルや。第一俺がそんなところに入ると思つか？」

と逆に聞いてきたので、僕は笑いながら首を横に振った。

「で、江沢はまだなん？」

そう僕が聞くと中久保が携帯を取り出した。

携帯を耳にあて、何かを話している。

わかった、と中久保は頷きながら携帯を閉じ、こっちを振り返った。

「少し遅れるみたい。だから先にマクド行っとこ」

お天気のお姉さんは、梅雨が過ぎたかどうかについては曖昧な言葉を並べていた。

だが、今日の天気はもう夏だ。暑い。

横を歩く水本も自分の大学の団扇で顔を扇いでいる。

マクドに着くと店内は異国のように涼しかった。

水本の団扇で腕を扇ぐと気化熱が心地よく体温を下げる気がした。

水本がコーラを買いに行っている間、僕は中久保の大学生活を聞いた。

「へえ、やっぱり綺麗な人が多いんやあ」

「うん。ほんまに感動するで、あれは。高校とは全然違うもん」
あまり女性に興味がない中久保がここまで言うのだから、大学って本当に凄いところなのだろう。

水本がＬサイズのコーラとチーズバーガーを持って戻ってきた。

「なんの話してたん？」

水本の問に中久保が、

「女の話」

と似合わない言葉を発した。

「同志社やったら、すぐそばに同女あるから綺麗な人さぞかしいやろっ」

「そんなんわからんわ」

中久保以上に女性に興味がない水本は少し嫌そうに答えた。

「悪い悪い。遅れた」

そう言っただけ現れたのは江沢敬太だ。

「どないしたん。その頭」

と僕は江沢の金に近い髪の色を見て、思わず吹いてしまった。

「まあ大学生やからな。そんな悪くないやろ」

と江沢はストレートパーマも当てた髪を整えるように触った。

大学生になったら色々と変わるとは聞いていたが、江沢の変化には驚くばかりだ。

高校の頃は、陸上部の江沢。ちなみに水本もだ。

頭はいつもくしゃくしゃで、服装など気にしない奴だった。

その江沢がまさかここまで変わるとは。
大学という場所はとても興味深い。

ファッション誌から出てきたような服装をした江沢は洒落た鞆を椅子に置き、トイレへと向かって行った。

僕は中久保と水本に笑いながら話しかけた。

「ザワちゃんめっちゃデビュ―してるやん」

「あつ、そうか。神部は前のボーリング断ったから今日がザワちゃんと会うの久々か」

と納得したように中久保が言った。

「ああつ、あつたなあ、ボーリング。確かに俺あん時行かんかったわ。じゃあ二人はあれ見るの二回目か」

すると、中久保と水本は頷いた。

「けどまた髪明るなったと思う」

と水本が言つと、

中久保が、わかるつ、と水本を指差した。

実に懐かしい雰囲気だ。

僕は三人と今と昔を行き来しながら話した。

高校時代、僕はこの三人に外山、井藤を加えた五人と特に仲が良か

った。

それぞれ友達がそこそ居たのだが、六人で遊ぶのがほとんどだった。

ボーリング、カラオケ、ファミレスなど時間さえあれば何かと遊んだものだ。

高三になって、僕は唯と付き合うことになった。

外山と中久保には相談をよく聞いてもらっていたので付き合いえたことを報告したが、他の三人には言わなかったので、後から怒られたのをよく覚えている。

特に江沢はしつこかった。

後に外山にも彼女ができたが、受験勉強が忙しくなる前までは、以前と変わらない付き合いを僕ら六人は保ち続けた。

「白河さんとはどないなん？」

マクドから出て、近くの本屋をぶらついているときに、中久保が真面目なトーンで聞いてきた。

「メールはしてんで。この前写メきた」

水本と江沢がいないことを確認し、僕は答えた。

二人には別れたことを言っていない。

「そつかあ」

写メを要求してこない中久保のこういうところが信頼できる根拠かもしれない、と僕は考える。

江沢は確実に、写メ見せろ、と言うだろう。

中久保は言った。

「まあ仲良さそうで安心した」

この吸い込まれそうな柔らかい笑顔。

どこか唯に重なるなあ。

本屋を出て、僕らはプリクラを撮りに行った。

唯と撮った回数より、こいつらと撮った回数の方が多いことに僕は小さな誇りを持っている。

撮り終え、僕と中久保はプリクラを人数分に分ける。

最初はめんどくさかったのも、今では自らハサミを手にしてしまう。

分けたプリクラを財布に入れ、僕らはガストに向かった。

僕らはガストを経由しないと満足感が得られなくなっていた。

プリクラをそれぞれに配りながら、僕らはそれぞれの最近を話した。

水本はサークルに真面目に取り組んでいるらしく、テニスが六人で一番強い自信があるらしい。

江沢もテニスサークルに入ったみたいだ。

だが、水本とは真逆の遊びサークル。

テニスはせず、飲み会ばかりやっているらしい。

中久保は話だけ聞くと一番真面目に大学生活を送っている。
友達もほどよく作り、授業も怠らない。

思い切って入った合唱サークルも楽しんでいるみたいだ。

みんな大学生だなあ。当たり前だけど。

僕はぬるくなったココアを一口飲みながら、抜けるように思った。

二十二時。僕らは解散した。

また今度、とみんな約束したが、その軽い言葉に僕は寂しさを覚えた。

一体、今度とはいつなんだろう。

電車の揺れが眠気を増加させていく。

僕はそれをギリギリのところで押さえながら、座席の端で頬杖をしている。

電車を降り、駅から家に帰っている途中、携帯が震えた。

そして、僕は開いた画面を見て思わず足を止めた。

「もしもし？どないしたん、急に」

すると、北海道から届いた懐かしい声が耳に響いた。

「久しぶり。いやあ、元気にしてるのかなあ、って」

僕はフフと鼻で笑った。

「相変わらず元気やで」

すると、唯も鼻で笑った。

「北海道はどうや？居心地とか」

「ほんまええとこやで。地元の人も優しいし」
よかった、と僕は短く答えた。

「貴明はどうなん？勉強は」

「勉強なあ。予備校とかは行ってないけど、まあなんとかなるよ」

「無理はあかんよ」

ありがとう、と息を吐くように返す。

「さっきまで中久保と水本と江沢と遊んでてん」
唯も高二のとき、クラスが一緒だった。

「うわあ、久保ちゃん懐かしい。変わってた？」
唯はテンションが上がったみたいだ。

「うーん、少し髪が茶色になっただけかなあ。後でプリクラ送ったるかあ？」
送って送って、とさらに唯は元気になった。

「わかった。夏休みは帰ってくるん？」

「うん。一週間ぐらい。日程とか詳しく決まったらまた連絡する」

「そう。迎えに行くわ」

「うそお、ほんまにつ？ありがとう」

この返事に思わず嬉しくなってしまった。

「うん。じゃあまた今度な。電話ありがとう」

「また電話する。勉強頑張つてや。バイバイ」

そして、北海道と大阪。繋がっていた電波が切れた。

家に着き、とりあえず自室に向かった。

クーラーをつけ、冷蔵庫から水を取り出し、口にかすかに残っていたガストのココアの雰囲気の水で消し去る。

風呂から上がって、次はコーラを開けた。

そして、ニュース番組をBGMにコーラを飲みながら、唯に今日のプリクラ一枚を送った。

同級生と遊んで気分が浮いているときにかかってきた唯からの電話。

それは、あまりにも簡単に昔の気持ちを深い深い想い出の底から押し上げた。

「単純やなあ」

思わずそう呟いてしまった。

三分後、唯から返事が届いた。

『ありがとう！江沢君変わりすぎやろ（笑）水本君も染めてるし。久保ちゃんは相変わらず女の子っぽいなあ（笑）けど、ほんまに懐かしい』

そして、下へ少しスクロールすると、

『高二から卒業までが一番幸せやったなあ』
と文字が並んでいた。

その文字からは、なんとなく寂しさが感じ取れた。

気がつくと、僕は携帯を耳にあてていた。

「もしもし？どうしたん？」

唯が戸惑っているのがすぐにわかった。

勢いだけで電話してしまった僕は少し返事に困った。

「いやあ、なんかメールめんどくさいから」

そして、ごめん、と付け足した。

すると、唯は静かに笑って、
「全然ええよ。逆に嬉しいわ」
と言ってくれた。

「やっぱり少し寂しいんやろ？さっきのメール見て思った」

「フフ、わかった？なんかなあ、一人になると思い出すねん。ほんで、めっちゃ後悔する」

「北海道行ったことにか？」
唯は、違う、と答えた。

「じゃあ、何にや？」
そして唯は、やっぱり大丈夫、と笑って答えた。

「そう。けど、寂しくなったら電話してや。全然迷惑とかちゃうから大丈夫。俺だって唯の声聞きたいし」

すると、唯は心配そうな声で、
「ほんまにええの？」
と聞いてきた。

「うん。大丈夫」

唯は鼻をすすって、

「ありがとう、貴明。ほんまに嬉しい」と言った。

「いえいえ。けど、もっと早く電話してくれたらよかったのに」

「ほんまそれなあ」

と笑って唯は答えた。

「気遣わんでええから。じゃあ、また電話してな。おやすみ」

「うん、ありがとう。じゃあ、おやすみ」

そして、北海道との通信が途絶えた。

ダメだ。完全に調子に乗ってしまったている。

携帯をベッドに放り投げ、僕は思った。

ニュース番組もいつの間にかバラエティー番組に変わっている。

唯が僕の元に戻ってきた訳でも無いのに。

ついつい、浮かれた感情に押されてしまった。

忘れようとしていた想い出。

消そうとしていたあの頃の感情。

それらは、もう臨界状態だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303w/>

過不足、 0

2011年10月19日17時12分発行